



# W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

## 第25号



## 「シューマン生誕200年」の贈りもの

……モーツァルトへの手紙 その1

会員番号 K618 加藤 明

私にとって生きるということと音楽を聴くということは一つのことです。

それは《善く生きる》ことに繋がっているのかもしれないほどに、です。

そして、モーツァルトさん、私のその絶えることのない音楽という芸術への恭順と内的鼓動の中心にあなたがいましたし、今もいるのです。

もう永い事、私はあなたの生み出した多くの作品たちに聴き耳を立てて来ました。

あなたが初めて私の耳たぶをかすめたのは(きっと「春への憧れ」だったと思う)小学生のころであり、快い響きとして疫病のように脳に入り込んだのが(たぶん「トルコマーチ」だったと思う)中学時代であり、驚きと感嘆をもって聴きはじめてのが(おそらく交響曲「40番」だったと思う)高校2年の春であり、寝ても醒めてもあなたに拘泥するようになったのはK375変ホ長調のセレナード(とりわけ第三楽章のアダージョだった)を繰り返し聴いたあたりを嚆矢としますので、振り返るとあなたに取りつかれるようになったその時点で、私はすでに論語の不惑の年齢を超えていたことになります。

「ああ、あなたは確か36歳に満たない人生だったのに！」と啞然としてしまいますね、40

歳を過ぎてあなたに目覚め、生涯の友いや師と仰ぎはじめたのですから。

あなたのことを語らせたなら止めどなく湧き起こる思いが次々と口を継ぐものですから、親しい友人も「また始まった！」と迷惑そうなので、ここは発想の転換、モーツァルトさんご本人へ還暦過ぎの日本語を話す一介のモーツァルト患者のつれづれなるモノローグを書き送ることにさせて頂いた次第です。

軽佻浮薄な行為のそしりは免れないでしょうが、モーツァルトさん、あなたの寛容な精神に甘えさせて頂きながら書き連ねてまいる所存です。

どうぞ、ご笑読下さいますように。



今日までの私はあなたからはほんとにたくさんの恵みを頂戴してきました。

あなたが生ききった証を残した1791年つまり昇天した後の私と、1756年以前のまだあなたがこの世に生を享ける前の私を比較して想い馳せることがあります。

その前後の格差の意味は絶大です。

あなたの後に私が生まれた僥倖を神様になんと感謝したらいいのでしょうか！

いま実はあなたの晩年の変ホ長調の弦楽五重奏曲K614を流しながらこのお手紙を書き始めているのですが、この曲にはあなたの音楽観が詰まっている、といつも感じてきました。

というのは、あなたの曲作りの目線が一貫して《音楽は楽しみ味わうもの》という定点から逸れない思想を根底に宿している、ということです。

たとえば、いま聴いている五重奏の第四楽章フィナーレのアレグロを私はついあなたのたくさん残した市民的な《舞曲》や《セレナード》などを連想して聴いてしまいます。

つまり、あなたの目線、立ち居地はあたかも《さあ、みんなで踊ろう！》といったところにあったように思えるのです（それほどまでにしなやかで楽しげで躍動的なんです）。

さらに、この五重奏を聴くたびに湧き起こる感慨のひとつに、《さぞかし演奏している五人のマエストロも楽しんで演奏していることだろうなあ・・・》といった奏する側の喜びが容易に認められることです。

この演奏する側も聴く側も一体的に楽しめる音楽こそ、あなたが目指したものなのかもしれませんね。

この軽やかな心地よさを讃えた五重奏があなたの最晩年に作られた最後の室内楽であり、先年同じ形式で創られたハ長調やト短調のもつ深刻さや揺らぎを乗り越えた後の結論という見方をするならば、なおさらモーツァルトさん、あなたの到達点がどんなものであったかを考えずにはられません。

それは、あなたの《こころの姿》の美しさと言ってもいいものです。

そしてそれは、一切の分析や検証を拒む神聖で孤高の音楽美の到達点のように思われてなりません。

そんなことですから、私にとって、この可愛らしくも恐るべき普遍性が分泌された名曲のす

ぐ後に、あの名高い市民的で革新的な歌芝居の《魔笛》が出来たことは至極当然のことと合点することができたのです（彼のアインシュタインはこの最後の五重奏曲にああなたの内なるハイドンパパへのオマージュを見ていたようすが）。



《魔笛》が誕生した裏舞台を覗くことは（たとえばフリーメイソン云々も絡めたりして）ともすればあなたを歴史的な音楽思想家に仕立て上げてしまいそうで本意ではありません。

確かに、フランス革命と機を同じくしていますので貴族社会の崩壊を予兆しているとか看破しているとみられても仕方ないのですが、私はむしろ単にシカネーダーという根っからの芝居好き（私は天才的なゴロツキ役者だと思っております）に同調しての友情出演ではなかったかと思っていますが、どうでしょう。

あの歌芝居がドイツ母国語であったことや多少お金にもなるということもあなたを友情出演に駆り立てた要因かもしれませんが、元来あなたはいつの時代も友達を大事にしてきたし、友に報いようと真剣に作曲してきた人でしたから。それにしても、あなたもシカネーダーも時代の機嫌というか空気を巧みに感じ取っていたのでしょうが、あまりに劇的な啓蒙のつわりの渦中に、あなたたちの《魔笛》が「自由の棹」を立てたことだけは事実なのです。

世界初の独立独歩プロのミュージシャンでなければ到底書くことのできなかった《魔笛》。

この21世紀初頭においても、あなたが心血を注いでこの世に贈りだした《魔笛》ほどの芸術性に富み、楽しませ、考えさせ、常に新しく、また観たくなり、何べんも聴きたくなる音楽劇は稀だと思います。

ああ、あなたの創った作品のたった一曲、どれをとっても後世に残り愛される曲なのに、あなたは700曲に及ぶ作品（あなたの言葉を借り

て言うなら「子供」たち)を私にお与えくださったのです。

そのたくさんの「子供」たちの中の一曲とはいえ、やはり《魔笛》は格別なんです。

その昔、中国伝来の「画龍点睛<sup>がりょうてんせい</sup>」という意味深の言葉があります。

著名な絵描きが描いた白龍の絵の最後に眼を描き入れたら、龍が生命を宿して天空に飛び立ったという謂れから、物事を成し遂げる最後の仕上げという意味を託された言葉です。

モーツァルトさん、世界中の人々に愛されている《魔笛》こそは、膨大なあなたの作品群とその作品群にひそむあなたの人生そのものの「画龍点睛」の一作ではなかったでしょうか。

(我が日本に一番最初に導入されたモーツァルト作品の一つに、パバゲーナの「おれも嫁っこほしいなあ」の Aria があるくらい馴染み深いお芝居でもありますから……)



ところで、私がこの《魔笛》をベーム指揮ベルリンフィル盤で聴いて早や40年の月日が経ちますが、最近この名盤でタミーノ役を歌っていたテノールのフリッツ・ヴンダーリヒと期せずして再会の栄を得ました。

以前にも書いたことがあります、私の聴いた限りにおいてはこのヴンダーリヒのタミーノを凌ぐテノールは現れておりません。

調べてみたら、ヴンダーリヒにとってはこのベームとの共演がほとんど最期のタミーノ録音だったようなのです。

というのは、驚いたことにヴンダーリヒはこのハンブルクでの《魔笛》録音(1964年)の約2年後にあなたと同じ35歳の若さで他界していたのです。

大変不幸な事故死でした。

天国のあなたに召されたかのようにあなたと同じ丁度35歳での昇天でした。

彼のデビューが1954年の同じタミーノ役で

あったことを想うとあなたに召された、とつい勘繰ってしまうのも頷けるというものでしょう。

私がこの名盤を初めて聴いた1969年にはすでにヴンダーリヒはこの世の人ではなかったことになるのですが、あの衝撃的なタミーノ以来、私の中から彼が消えることはなかったし、いまだに生き生きとしてあなたのこしらえた《魔笛》の宇宙に引き連れていってくれるのです。

あなたは彼のミューズの国で疾うにヴンダーリヒに招かれ、その美声に聴きほれておいでかもしれませんね。

ヴンダーリヒに「ぼくの《すみれ》を歌ってくれないかい？」などと我がまま言って。



ヴンダーリヒ

不滅の声～オペラ・Aria集 [DENON] COCQ 84633

今回のヴンダーリヒとの再会は今年生誕200年祭にあたるローベルト・シューマンが橋渡ししてくれました。

大好きな「詩人の恋」のCDを探していたら、偶然その「詩人の恋」を歌っているヴンダーリヒその人のCDをお店で視つけたのです。

革新的なハイネの叙情詩がシューマンの生き方と重なったものか、とっても魅力的でロマン派の面目躍如を思わせる歌曲集だと思っていました。

ご多分にもれず、私はこのヴンダーリヒ盤に

すっかり惹きつけられてしまいました。

ピアノのフーベルト・ギーゼンが大変面白い深い伴奏をしていることも私を虜にした理由の一つですが、ヴンダーリヒの歌声はとてつややかで改めてリートの楽しさ、素晴らしさを教えてくれたのです。

惜しむらくは、彼がモーツァルトさん、この世にあなたのリートを一曲たりとも残してくれなかったことが悔やまれてなりません（そう、ペーター・シュライヤーのように）。



思いのままに語ってきましたが、お仕舞いに最近起きた私事であなたにまつわるお話を記して閉じたいと存じます。

その時まで、私は足掛け15年もの間、大切に乗り回してきた愛車を手放すなどとは少しも考えてはいませんでした。

Oさんというディーラーのセールスマンと出会うまでは（Oさんとお読みください）。

もうかれこれ18万キロも共に過ごし、私の悲喜こもごもが積もりに積もった愛しき名車でしたから。

そのOさんは私の車が耐用年数を過ぎて古いものであることを知っていたのでしょうか、数年前から《忘れたころにやってくるセールスマン》として、いつの間にやらお会いしてはコーヒー談話を交わすようになっておりました。

一貫して話すより聴く姿勢の寡黙なOさんのセールスは、「買ってください」という売りの姿勢がまったくもって見られないという特異なセールスパフォーマンスでした。

それでもなぜ「セールスに来た」と私が感ずるのかというと、それ以外に来訪の理由がまったく見当たらないからに他なりません。

対話の間（ま）がとれない、だから決して楽しいとは言えない、それでいてつい訪問されると応えてしまうといった不思議な人物なのです

が、こうして数年もの間、当たり障りのない対話だけのOさんというセールスマンとのやりとりが続いたのでした。

それは、あたかも始めも終わりもない淡々とした平均律を思わせる、言わば対位法的な言葉の掛け合いの時間でした。

ところが、この5月に淡々としたそんな掛け合いに異変が生じたのです。

その5月のOさんの来訪はそれまでと異なり、事前の予告がないものでした。

予期しなかったカタチでの突然の来訪に、私は直感的に「あっ、Oさんいよいよほんとのセールスにきたな！」と確信しました。

案の定アポなし訪問のOさん、対面するなり、いままで一度も見せたことのないセールスマンの熱い眼差し、いつもの寡黙さとは打って変わった勢いで私を取り押さえ、囲い込み、攻め立ててきたのでした。

ですから、「今日は、セールスにまいりました」という低音ながら歯切れのいい彼の口上に、すっかりこころを掴まれてしまっている自分に気づくのにあまり時間はかかりませんでした。

奇襲攻撃された私は、躊躇の間もなく、いや何ら抵抗もなく、Oさんから提案通りの新車を購入することになったのですが、現在の愛車を手放すにあたり、とっさに三つの条件をつけさせてもらいました。

一つ、現在の車に取り付けてある特殊なスピーカーを新車に移設してもらうこと。

一つ、納車日を6月18日とすること

一つ、車両の登録ナンバーを618番にすること

この三つ条件を呑んでももらえないだろうか、と。

もちろん、Oさんにはどうして6月18日に納車し、登録番号を618にしたいのかを丁寧に説き明かしました。

モーツァルトさん、もうお分かりでしょう。

私が提唱したあなたの愛聴団体「モーツァルト広場」にはケッヘル番号による会員登録制度があり、私の登録番号がK618・「アヴェ・ヴェルム・コルプス」であることから、Oさんに納車日と登録番号を前述のようにさせてもらったという訳なのです。

Oさんはこの条件を快諾し、私はこころ弾ませて、その日を待ちました。

一つの買い物で、こんなにドキドキしたことは空前であり、絶後かもしれません。

そして、やってきた2010年6月18日。

新たな「モーツァルトと私」の記念日です。

目の前に真新しい618の登録ナンバーが巨きく踊っている私の新車が出現したのです。

そして、見違えるほどの巨人に変貌したOさんが満面に笑みを浮かべて私を包むように迎えてくれました。

その時、私の小さな秘密を知ったOさんが、客のためにやり遂げた一人のセールスマンから、

新しい友に変身してくれたような鋭い感動を覚えました。

なぜなら、私はあの対話の間がとれなかった寡黙なOさんの、饒舌にして丁寧な納車説明にすっかりこころ奪われ、その献身的な姿勢にOさんの人としての心映えを強く感じたからでした。

私は確かに眩いばかりの新車を購入しましたが、同時にOさんというかけがえのない友人もつくることができたという二重の喜びに胸が高鳴ったのです。

新車の運転席に座って聴いた第一号のCDが、K618「アヴェ・ヴェルム・コルプス」であったことは言うまでもありません。

それは、あの15年間乗り回した愛車となんら変わらぬ、あなたの神聖で澄みきった四部合唱の歌声が、真新しい車内いっばいに優しく駆け巡る法悦の瞬間でもありました。

end

## 世界遺産とモーツァルト

会員番号 K239 高橋 文夫

今春、大学生の末娘がマチュ・ピチュに旅行すると言い出した。旅行好きの妻に尋ねると、南米にあるインカ帝国の遺跡で、世界遺産にも指定されているという。世界遺産に指定されてから旅行者も多く、治安も大丈夫と知人に訊いて、ならば安心と思っていたところ、2月に豪雨による洪水が現地で発生し、娘のマチュ・ピチュ旅行は、残念ながら中止となった。

この時、ふと疑問に思ったのは、世界遺産に指定されているのは、美しい自然や貴重な遺跡・歴史的建造物が大部分で、何故かクラシック音楽は対象外なのである。

「人類の遺産」と称して恥ずかしくない数々の名曲がありながら、1曲もノミネートされな

いのは、口惜しい。そこで、仮に選ぶとしたら、どの曲を世界遺産に指定すべきか、自分なりに考えてみることにした。

まず、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェンの3大作曲家から、敢えて1曲ずつ選定してみる。

バッハは比較的決めやすい。数ある名曲の中でも「マタイ受難曲」が抜きんでて素晴らしく、以前から「人類の遺産」であると考えてきた。

ベートーヴェンはやや難しいが、やはり交響曲第9番「合唱」が本命であろう。

さて、最も難しいのがモーツァルトである。モーツァルトは多作家の天才であり、名曲が多すぎて、世界遺産として1曲のみ選定するのは

至難の技である。晩年の作に限定しても、ある人は「レクイエム」を、またある人はオペラ「魔笛」を選ぶであろう。「ピアノ協奏曲27番」「交響曲40番」も有力である。

しかし私は敢えて、亡くなる2ヶ月前に作曲された「クラリネット協奏曲」を選定したい。楽器編成こそやや小さいが、この曲こそモーツァルトの「白鳥の歌」だと信じるからである。

以下に私が感じるままに、この曲を概説してみたい。

イ長調で始まる第1楽章の出だしは、明るくと言うよりも、むしろ慈愛に満ちた観音菩薩をイメージさせる優しく温かな響きを持っている。この温かな響きこそモーツァルト音楽の本質だと、私は考えている。そしてクラリネットのソロが始まると、この響きをバックに、人生の喜怒哀楽すべてを歌い上げる。嘗ての栄光、嫉妬、妨害、そして没落を経験したモーツァルトは35才にしてすでに老境に達していたのであろう。

第2楽章は天上の世界である。ソロもオーケストラも最小限の音符で至高の音楽を奏でる。息を呑むような美しさである（特にオーケストラの伴奏も注意深く聴いて頂きたい）。第1主題に続く第2主題は、美しくも微かな憂いを秘めた不思議な下降音階で作られている。何が不思議かと言えば、ソロとオーケストラが交互にゆっくりと、繰り返し下降音階を歌うと、それを聴いている私の体が宙に浮き、逆に上へ上へと上昇していく錯覚に囚われるのである。天上界が雲の間を抜け、さらに上へ上へと上昇して

いく感覚、と言ってもいい。これはモーツァルトの魔法なのであろうか。

第3楽章はピエロの音楽だと私は考えている。モーツァルト自身がその人生において、しばしばピエロ的な行動をしてきた。何とかして皆を笑わせよう、何とかして皆を喜ばせようと気を配りつつ生きてきた。この第3楽章のピエロは、モーツァルトその人なのであろう。

ピエロの顔は楽しげにも見えるが、よく見ると悲しそうにも見える。目は笑っているようにも見えるが、実は泣いているようにも見える。流れるように転調を駆使できるモーツァルトは、長調から短調へ、短調から長調へと何度も転調させ、いわゆる「泣き笑い」の表情を見せる。

しかしピエロが本当に涙を流したら、周りが戸惑ってしまう。涙を泪にとどめ、ピエロらしく、笑顔を作って明るく華やかにフィナーレを迎えつつ、曲は閉じられる。

以下にお奨めのCDを記します（完全に著者個人の好みです）。

- 1) カール・ライスター (C1) ネヴィル・マリナー指揮アカデミー・オブ・セントマーティン・イン・ザ・フィールズ 1988年
- 2) ジャック・ランズロ (C1) ジャン＝フランソワ・パイヤール指揮パイヤール室内管弦楽団 1963年（音質がやや劣ります）
- 3) アントニー・ペイ (C1) ホグウッド指揮エンシェント室内管弦楽団 1984年

## バックヤード

会員番号 K10 畠山久雄

新秋田県立美術館や市の公共公益施設「にぎわい交流館」\*が巷の話題となっているが、秋田市文化会館にサンパル秋田が入居したことに

よる弊害については、あまり話題とはなっていないようだ。

サンパル秋田は、中央公民館、女性学習セン

ター、青少年センターの3施設の複合であり、平成15年11月に秋田ニューシティに入居していた。しかし、このビルが解体されることになり、暫定措置として秋田市文化会館の会議室等を改修、この4月から入居したのである。入居に伴い、公民館などに所属する文化サークル、スポーツサークルも文化会館を利用している。

さて、タイトルのバックヤードとは、一般的に商品売場の裏側のことで、在庫の保管場所や加工場などを指す。美術館などでは、搬入した美術品の荷捌きをしたり、梱包を置いたり、収蔵品を保管したりする場所をバックヤードと呼んでいる。バックヤードが狭いと展示替えが思い通り出来ず、展示に変化が少ないと客足が遠のくことはご賢察の通りである。

一方、文化会館でも、ステージのあるホールに対し、出演者や裏方のための楽屋や控え室をバックヤードと呼んでいる。多くの団体が出演する催物では、バックヤードが運営上不可欠であり、主催者はホール使用申込みと同時に館内の会議室も確保してきた。秋田市文化会館は、これまで県内最大級のバックヤードを保有する公共ホールであり、文化活動の拠点ともなっていた。さらには、多くの会議室を活かした各種大会、いわゆるコンベンション会場となることも多く、街の活性化の一翼を担ってきたのではないか。

今や、その会議室は公民館などのサークルが

使用している。つまり、秋田市文化会館はバックヤードを失ったのである。幸いにも、この措置は暫定であり、サンバル秋田の移転場所が定まるとバックヤードは回復できる。

しかしながら、この間のコンベンションや大規模公演は、県内を素通りするか、規模を縮小するしかない。大規模でなくとも優れた芸術鑑賞の機会はあるが、選択肢が少ないということは良くないことであり、暫定措置が短期間で終わることを願わずにはいられない。

ところで、バックヤードが肝心なのは、美術館やホールだけではない。スポーツ施設を含め、あらゆる施設で重要であるが、いわゆる裏方の設備であり、通常は考えが行き届かない部分であろう。新秋田県立美術館や市の公共公益施設「にぎわい交流館」においても、文化会館が失ったものと同様の過ちをしないよう、モーツァルトを愛する私達も積極的に発言すべきと思料しています。

※ [秋田市中心市街地再開発事業計画] 大半が空き地となっている秋田市中通の1.7ヘクタールに、新秋田県立美術館や市の公共公益施設「にぎわい交流館」、商業モールなど約4万2300平方メートルの複合施設を整備。今年8月着工し、2012年3月完成予定。総事業費約150億円のうち国、県、市が計約73億円を補助する。県は10年度一般会計当初予算案に、建物の解体費など事業費約5億円や県立美術館の取得費約3億3000万円を計上。市も同規模の関連費を当初予算案に盛り込む。

引用先：(河北新報ニュース) 2010年2月15日月曜日

## ドイッチェスハウスの魅力のコンサート

会員番号 K203 松田至弘

ドイッチェスハウスとは、ドイツ騎士団の家のことであり、ウィーンのシンボル・聖シュテファン大聖堂の南塔側に位置し、くつつくようにして建っている。

私は長い間、この家で行われるモーツァルト・コンサートを一度聴いてみたいと思っていた。そして、今回その願いを実現すべく、すぐ近くの「ホテル・オイローパ」に宿をとった。

実を言うと私は、すでにこの家を三度訪れている。しかし、いつも時間に制約され、コンサートを聴くまでには至らなかった。

少し説明を加えると、ドイツ騎士団の正式名称は、ドイツ人の聖母マリア騎士修道会であり、十字軍の時代に聖地巡礼者の保護を目的に設立されている。

後にドイツ騎士団は、活動の場を東欧に移すと、一時騎士団国家を創り上げるまでになったが、諸国の抵抗を受けて終焉を迎え、慈善団体となって現在も存続している。ドイッチェスハウスは、この騎士団のオーストリア支部になっているのだ。

一般には馴染みのないドイツ騎士団の家であるが、モーツァルトファンが注目するのは、次の理由からであろう。

ザルツブルク時代のモーツァルトの主君コロレド大司教は、ウィーンに滞在する時にはここを常宿としていた。そして、大司教の出頭命令を受けたモーツァルトが、1781年3月16日にこの家へ嫌々やってきて、5月2日まで滞在したのである。

ドイッチェスハウスには、ウィーン最古の小さなコンサートホールがあり、コロレド大司教はザルツブルク宮廷主催の演奏会を実施した。従って、ここはモーツァルトが実際に演奏した場所なのである。

更にここは、コロレド大司教とモーツァルトが激突し、両者の関係が決裂に至ったところでもある。かねてから主君への不満をつのらせてきたモーツァルトが、自立してウィーンに定住し、自由な音楽家として生きることを決意した場所でもあるのだ。

夕暮れ時になったので私は妻と一緒に、かつてモーツァルトやベートーヴェンが演奏したというレストラン（現在カフェ・フラウエンフー

バー）で夕食をとり、それからドイッチェスハウスに向かった。

入口のすぐ右側はドイツ騎士団教会になっているが、この日は夜の集會が行われていた。中を覗くと、胸に十字章のついた真っ黒い制服を着た牧師さんが熱心に話をしており、多くの人々が静かにそれを聞いていた。

この騎士団教会の隣、窓から中庭の見える半地下室が、「Sala Terrena」と呼ばれるコンサートホールである。「モーツァルト・アンサンブル」がここを会場としてコンサートを行っており、年間を通して火・金・土・日曜の夜が演奏日になっている。チケットは、町のプレイガイドで買うことができ、また、ホテルでも手配してくれる。



ドイッチェスハウスの小ホール Sala Terrena

プログラムをもらって入場してみると、ホールの壁、アーチ型の天井は美しいフレスコ画で装飾されており、それがフロアスタンドとシャンデリアの明かりに照らされて幻想的雰囲気をかもし出している。客席には、50人分の椅子が置かれていた。この人数が、ホールの最大収容人数なのである。

「モーツァルト・アンサンブル」は、モーツァルトを主にウィーンの古典派時代の音楽を演奏する楽団であった。4人の室内楽演奏家（ヴァイオリン2人、ヴィオラ1人、チェロ1



「モーツァルト・アンサンブル」の演奏

人)によって構成されており、18世紀の音楽家の衣服を身に着けて登場し、コンサートは7時半に始まった。

演奏曲目は、モーツァルトの「ディヴェルティメントニ長調」(K・136)、「セレナード第

13番ト長調」(アイネ・クライネ・ナハトムジーク)(K・525)。シューベルトの「弦楽四重奏曲第12番(四重奏断章)ハ短調」(D・703)とハイドンの「弦楽四重奏曲第39番ハ長調(鳥)」(Op・33—3)。そして、アンコールに応じて、モーツァルトの曲が奏でられた。

私は、演奏の始まる前から興奮気味であった。モーツァルトの時代にタイムスリップし、予約演奏会に参加しているような気持ちになった。そして、洗練された滋味豊かな演奏に感動した。

ハイドンの曲は、鳥のさえずりを思わせるヴァイオリンの二重奏が大変印象的であった。しかし、何といても、保存状態が良く音響効果抜群の魅力的な小ホールで、大好きなモーツァルトの不朽の名曲を聴けたことは、本当に幸せなことであった。

## 酒とモツの日々 (25)

会員番号 K488 佐藤 滋

灰田勝彦の歌う「新雪」が心に沁みる季節になりました。会員の皆様いかがお過ごしですか？

年を越せば、モーツァルト没後220年・・・というより21世紀の始まりの10年を振り返る節目の年になります。この10年、生活や環境の変化は凄まじいものでした。機械化、情報化は便利ではありますが、それで仕事は楽になったのでしょうか。情報化は家庭を職場の延長にただけでなく、携帯電話は移動中も仕事をさせるようになってしまいました。

かつてモーツァルトは、妻と会話しながら作曲しましたし、移動中の馬車でも仕事をこなしました。が、彼は天才中の天才。機械の高性能化は、我々凡人にモーツァルトと同じレベルを求めているようです。仮に機械が、モーツァルト並の処理能力を与えてくれたとしても、彼我

の大きな違いは仕事を楽んでいるか否か、ということでしょう。つらい仕事に追われながら、機械がさらに追い打ちをかけてきたら、仮に医療の進歩によってモーツァルトの三倍、長生きしたとしても幸福な人生と言えるのでしょうか。

モーツァルトの時代、演奏会はほぼ半日かけて、だらだらとやっていました。父からの叱責の手紙も半月かけて届きました。コロレドに出した退職願いも受理まで2ヶ月かかりました。人間が生きやすかった時代の話です。今はCDを聴いている途中で電話がかかります。クレームには即対応、初動がまずければ即処分です。解雇は打診もなくメールで通知されることもあります。つくづく人間が生きにくい時代になりました。

こんな時代だからこそ「音楽」を大切にしたいと思います。どうしても人の「手間」と「感

性」と「経験」を経なければ生み出せない、というものこそが、時代を超えて人に感動と癒しを与えてくれるのでしょうか。酒造りの基本も変わらないといいます。杜氏さんも今が一番忙しく、またやりがいをもって働いておられる頃ですね。来年はどんなお酒が生活を楽しませてくれるのか期待しましょう。

時代に痛めつけられて、自ら命を絶つ方が秋田にはたくさんおられます。心を痛めた方はモーツァルトの「すみれ」を聴いてみて下さい。理不尽な仕打ちを静かに受け止める花の可憐さに心が洗われます。名歌手シュワルツコップは「歌を聴く前と聴いた後では、その人の人生は変わっていなくてはなりません」と語っていま

す。歌謡曲がお好きな方は「北上夜曲」は如何ですか？「僕は生きるぞ、生きるんだ〜」の詩には、私も何度も励まされたことがあります。

「遊びをせむとや生まれけむ」とあるのは梁塵秘抄ですが、私は来年からの10年は、「謙虚に生きる」「堅実に生きる」「懸命に生きる」の3ケン生活を提案します。これを「ケン3を積む」と申します。おやじギャグですね。無論「健康に生きる」ことが前提ですが……。健康の源「百薬の長」である、お酒がじつくりと命を身ごもっているこの冬、私たちも音楽を友に、心穏やかに暮らしてまいりましょう。

この厳しい冬が過ぎればシューマンの歌曲「新緑」が心に沁みる季節がやってきます。

## 事務局より

2010年もあと数えるほどとなりました。今年1年皆さまはどのように過ごされたでしょうか。4人の親である私は1年中子ども達に振り回されたような記憶しかないのですが、それはそれ、充実した毎日を過ごしている証拠かなと思っています。

今年は2月に冬季オリンピックが行われ浅田真央ちゃんと韓国のキムヨナとのメダル争いに一喜一憂したことを思い出します。5月には上海で国際博覧会が始まり、宮崎では口蹄疫問題が広がり、そして6月は鳩山首相が退陣、当時の小沢幹事長も辞職しました。

夏場の6月、7月は肌寒い毎日が、8月には逆に猛暑の毎日が続きました。

科学の分野では6月に小惑星探査機はや

ぶさが地球に帰還、10月には鈴木章、根岸英一両氏がノーベル化学賞を受賞しました。

民主党が惨敗した参議院議員選挙も今年の7月でしたね。

来たる2011年は年中明るい話題で持ちきりの1年になることを期待し、そしてわが秋田県内でもいつでも笑顔、笑い声が絶えない1年になることを祈念しつつ結びいたします。

追伸。この会報誌の原稿を書いてみたいという方がおりましたら加藤代表か事務局本田までお気軽に声をおかけ下さい。是非たくさんの方からメッセージをいただければ幸いです。(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております (H22年12月現在109名)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ・・・イヤタカ内

加藤 携帯電話 090(7939)4058 又は 本田 (事務局) 080(1673)8322